

オートリカスの「善き行ない」 —『冬物語』におけるごろつき行商人の受容をめぐって—

丹羽 佐紀

はじめに —ボヘミアという名のイングランド—

『冬物語』に登場するオートリカスは、陽気な唄で人々を魅了しながら物売り歩く行商人であると同時に、その商売の最中に客の懐を失敬するごろつきでもある。彼は『冬物語』の原作とされるロバート・グリーン『パンドスト』(Pandosto, 1588)には登場せず、家臣のアンティゴナスや侍女ポーリーナ同様、シェイクスピアが独自に創り出した人物とされる。¹ 劇中において、シチリーとボヘミアという二つの異なる世界のうち、オートリカスが活躍するのは、主として羊飼いや道化たちが牧歌的光景を繰り広げる後者の場面である。ここでは、本来は海がないはずのボヘミアに海岸が出現し、登場人物たちが羊の毛刈り祭を心待ちにし、そうかと思えば唐突に熊が現れ、熊いじめを連想させるなど、観客にとっては未知のボヘミアよりむしろ上演当時のイングランドの光景を思い出させるような場面が随所に展開される。ごろつきのオートリカスも、このような光景の一局面に属する人物である。

オートリカスが表象する人物たち、すなわち行商人とごろつきもやはり、上演当時のイングランドに多く存在した。例えば、Beier も述べるように、行商人はその職業自体が移動を前提としていることから、当時はロンドンだけでなく地方においても多く見られたと考えられる。² 『冬物語』にオートリカスが登場することにより、イングランドの観客は、劇中のボヘミアに自分たちの現実社会を垣間見たであろう。しかしこれらの行商人やごろつきは、実際の社会においては必ずしも歓迎される存在ではなかった。同じく Beier によれば、当時のイングランドにおいて行商人やごろつきに対する人々の風当たりは強く、職業と見做されるはずの行商であっても、特定のコミュニティに定住せず放浪者のような生活を送る彼らのスタイルは、行政当局の取り締まりの対象となった。³ ごろつきやいかさま師の類においてはなおさらである。それにもかかわらず、『冬物語』においてオートリカスは持ち前の機転と陽気さで様々な登場人物と関わり、行商人とごろつきの持ち味をフルに発揮して、むしろこの劇の喜劇的場면을盛り上げている。

それでは、彼が劇中で繰り広げる、抜け目ないながらも陽気な場面展開は、実際の社会における彼らのような人物への風当たりの強さと、どのように観客の中で折り合いをつけられたのであろうか。社会的通念から言えば、他人の懐から金銭を掠め取るオートリカスの行為は、単純な可笑しみによる笑いの浄化作用を当時の観客にもたらしたとは言い難い。原作『パンドスト』を踏襲し、ボヘミアという、イングランドと異なる空間が設定されていることは確かに一つの大きな緩和作用の働きを為していると言えるが、本論では、彼が劇の最後の場面において、王侯身分の登場人物たちの再会に重要な役割を果たしていることに注目したい。劇の中では、オートリカス自身によってさりげなく語られているだけであるが、5幕3場におけるリオンティーズとハーマイオニ、パーディタを始めとする登

場人物たちの再会は、彼が重要な立役者となって実現したものである。5 幕 2 場でオートリカスは、「羊飼いの親子を王子の船に乗っけてやったのはおれだ。やつらが包みのことだとかなんだとか言っていると王子に知らせたのもおれだ。」(‘I brought / the old man and his son aboard the prince; told him I / heard them talk of a fardel, and I know not what’ (5.2.112-14))と云い、自分は羊飼いの親子に「心ならずもよいことをしてやった」(‘I have done good to against my will’ (5.2.121)) と独り言を言う。⁴ 本来であれば悪事を働くことを厭わず、それを 4 幕 3 場で誇らしげに豪語する彼であるが、5 幕の場面における、思いがけず善き行ないをしてしまったことへのつぶやきは何を意味するのか。実際の社会では検挙の対象となり得たオートリカスのような人物が、劇の中で受け入れられる人物として機能する仕組みについて、劇中の具体的場面との関わりにおいて論じる。

初期近代イングランドにおける行商人とごろつき —オートリカスの場合—

16 世紀から 17 世紀にかけて、イングランド各地に見られた行商人およびごろつきの社会的位置づけについて、Jütte は、初期近代のイングランドが抱えていた貧困問題、およびそれに対する治安統制を司る行政当局の対応等を、いくつかの事例を挙げながら紹介している。⁵ また、16 世紀の印刷業者 John Awdeley の手になる *The Fraternity of Vagabonds* (1561) 及び Thomas Harman による *A Caveat for Common Curstors Vulgarly Called Vagabonds* (1566) では、当時の放浪者やごろつきの詳細な分類をしている。⁶ ただし行商人やごろつきの実態を明確に把握するべく、当時の記録そのものを手がかりに詳細に分析することは本論の目的ではない。そもそも Beier も述べるように、一部の取り締まり事例を取り上げ、それぞれへの行政当局の対応がどの程度他のケースに対しても適用されたのか、あるいは市井の人々は個々の事例にどのように反応したのか、特定の人物に関する記録のみを根拠として汎用性を持つと見做すのは無理がある。⁷ 例えば、一方で商いに精を出し、自らが生きるための術を身につけて儲けの手段とする場合、それ自体は非難される要因を持たない。実際、需要と供給の観点から考えれば、商売を成り立たせる買い手というものが存在したに違いないのである。だが同時に、その商売に放浪や犯罪（特にここでは窃盗などの軽犯罪）が絡むなど複合的な要素が重なった場合、そのような人物に対する他者の受けとめ方は、どこに視点を当てるかで変わってくる。そして『冬物語』においても、オートリカスに向けられるべき視点は一つではない。

オートリカスは、様々な顔を持っている。4 幕 4 場で、彼はまず、類い稀なる唄い手として道化の召使いに称賛される。

Servant: O, master, if you did but hear the pedlar at the
door, you would never dance again after a tabor and
pipe. No, the bagpipe could not move you. He sings
several tunes faster than you'll tell money. He utters
them as he had eaten ballads, and all men's ears grew
to his tunes. (4.4.183-88)

召使いによれば、オートリカスは「まるで胃袋に歌を詰めこんでみたいにあとからあとから吐き出す」ので、彼が唄えば聴く者は皆その虜になるほどだと言う。彼は当時の観客にも馴染みがあったバラッドの一節を歌い、客を惹き付ける。歌の上手さと知識は彼の才能であり、同時に商売を円滑にするための強力な武器である。

さらに、彼が客の前に並べてみせる綺麗な布も、登場人物たちの購買意欲をそそる。道化は、オートリカスに金を盗られたにもかかわらず、布を欲しがると恋人のモプサに、買ってくれとせがまれる。この場面から、オートリカスが商売上手で、多くの客を引き寄せる才能があるのは明らかである。少なくとも、この場面でオートリカスは他の登場人物たちに拒絶されるどころか歓迎されており、その点において彼は行商人としてコミュニティと接点を持っていると言える。

同時に、彼がスリのプロであることは、登場人物たちには知らされなくても観客の目に明らかである。彼が4幕3場でお人よしの道化から簡単に財布をすり取り、何も気がつかない「獲物」(‘a prize’ (4.3.30)) にしてやったりとあざ笑う場面は、オートリカスが自らの行為に躊躇しておらず、むしろ誇りに思っていることを明らかにする。ここで彼を行商人でなく犯罪者として見れば、先ほどの商売上手の才能も騙しの手口の一手段に見えてくる。前述するように、Beierによれば行商人は定住せず偏在的であった。人々が仮に後で彼の犯罪に気がついたとしても、いなくなった後では捕えることが難しいという点において、行商という生業は彼の犯罪に実に好都合である。このようなオートリカスの立場は、観客が自分たちの日常生活において遭遇するかもしれないスリやかっぱらいの実態を思い起こさせるという点で、逆説的に彼を身近に感じさせる。それは、危機感と同時に、コミュニティの中で起こり得る事象に対する一種の共感を、観客に呼び起こさせる効果を持つからである。行商人としてのオートリカスは、犯罪を通じてもまた、観客にとって受容のきっかけを作っている存在なのである。

フロリゼルとの衣装交換 — 宮廷における受容 —

オートリカスは、劇の中で羊飼いや道化のような庶民と接するだけでなく、王侯身分の登場人物たちと接近する機会を持つ。4幕4場で、父親の追跡を逃れるためにボヘミアを脱出しようとする王子フロリゼルとカミローは、たまたま通りかかったオートリカスを見つけ、彼にフロリゼルと衣装を交換するよう頼む。変装はシェイクスピアの劇において重要な意味を持つが、オートリカスの変装も、行商人かつごろつきである彼の正体を他の登場人物たちに見破られないようにするだけでなく、コミュニティはもちろん宮廷に近づく特権を彼が手に入れることを可能にする。実際、オートリカスは、フロリゼルと衣装を交換したすぐ後で、その効果を実証してみせる。羊飼いと道化が、パーディタを見つけた時に拾った包みを王様に見せ、全てを告白しようと思立って出かける途中、役人のふりをしたオートリカスが彼らに待ったをかける。怖気づく二人に、オートリカスは自分が着ている衣装を見ると強調し、「おれは宮廷人だ。この宮廷風の身なりが目に入らんのか？」と威嚇してみせる。

Shepherd: Are you a courtier, an't like you, sir?

Autolycus: Whether it like me or no, I am a courtier.

Seest thou not the air of the court in these enfolding?

Hath not my gait in it the measure of the court?

Receives not thy nose court-odour from me? (4.4.733-37)

オートリカスをてつきり本物の宮廷人だと信じ込んだ羊飼いと道化は、王に拝謁できるようオートリカスにとりなしてもらい代わりに、その礼金を彼に払うことを約束する。二人は、彼の親切な申し出に「あのかたはおれたちのために神様がつかわしてくださったような人だ」(‘He was provided to / do us good’ (4.4.834-35)) とすら言い、感謝の気持ちを口にする。

オートリカスの変装はここで、彼の存在を、庶民たちの場であるコミュニティだけでなく宮廷においても知らしめることを保証する手段として、観客の前に提示される。たとえ正体がばれても、彼に臆する気配はない。自分は「悪党呼ばわりされて恥かくことはもう慣れっこ」(‘for I am / proof against that title’ (4.4.844-45)) だから、衣装が効果を発揮する間は存分に利用すればよいのであって、先の事は意に介さない。オートリカスを他の登場人物たちに宮廷人だと思わせる衣装は、劇中において、彼がフロリゼルから盗み出すつもりなど毛頭なかったにもかかわらず偶然彼に転がり込み、実際に彼を宮廷に近づける。そしてオートリカスのこの新しい衣装は、行商人とごろつきに加え、偽の宮廷人というもう一つの側面を新たに彼に与える。

オートリカスと家臣たち —シチリーにて—

5幕2場で、リオンティーズたちに起こった一連の不思議な出来事について、オートリカスと3人の家臣たちが噂話をしている。アーデン版テキストによれば、3人はそれぞれ、Gentleman, Rogero, Steward という呼び方で区別されている。⁸ アーデン版の編者 Pitcher によれば、Rogero という名前は、家臣の中でも比較的身分の低い者を連想させる名前とされるが、3人目は「ポーリーナの執事」(‘the Lady Paulina’s steward’ (5.2.26)) と呼ばれており、この家臣たちはそれぞれ少しずつ位階が異なる関係にあると言える。(142n) 彼らが、オートリカスも交えて自分たちの見聞きしたことを噂しているのである。

本来ならば、王侯貴族に仕える執事のような立場にある者が、行商人やごろつきと、ゴシップをネタに親しく言葉を交わすような接点があるとは考えにくいだが、ここでは位階の微妙に異なる家臣たちが自由に噂話をする状況を創り出すことにより、シチリーではおそらく正体が知られていないオートリカスが、王侯貴族の内部事情に詳しい「執事」(steward) の話を聞き出す場面を違和感のないものに行っている。少なくとも噂話に耳を傾けているオートリカスを、家臣たちが邪げんに扱う言動は見られない。4幕4場でフロリゼルと衣装を交換したオートリカスが、5幕2場のシチリーの場面ではどのような衣装を身につけているかは定かではなく、アーデン版とケンブリッジ版のいずれのテキストのト書きにも、この場面におけるオートリカスの衣装について言及していない。⁹ しかしリオンティーズた

ちに起こった異例づくめの出来事に興奮しているとはいえ、家臣たちが見ず知らずのオートリカスを交えて話をするに異を唱えない演出がなされているとすれば、それはまさしく、オートリカスが、ボヘミアだけでなくシチリーにおいても既に衣装を通して受け入れられていることを意味する。

劇中におけるオートリカスの位置づけ —善き行ないについて—

5幕2場でオートリカスは、自分が心ならずも他の人物たちに幸運をもたらしたことに戸惑いを感じている。

Autolycus: Now, had I not the dash of my former life
in me, would preferment drop on my head. I brought
the old man and his son aboard the prince; told him I
heard them talk of a fardel, and I know not what;
...
Here comes those I have done good to against my will,
and already appearing in the blossoms of their fortune. (5.2.111-22)

羊飼いと道化は、自分たちが育てたパーディタの本当の身分が明らかになったことで、その恩恵を受けて安定した生活の目途が立つことになり、上機嫌である。道化はオートリカスについても「友達」(‘his friend’ (5.2.160)) と呼び、友達が正直者であると宣誓することを厭わない。彼は「お前があつぱれ武勇の士じゃないことはわかっていても、やっぱりそう誓言してやるから、その通りになってくれ」とオートリカスに頼む。オートリカスは、これからは「せいぜい努力いたします。」と応えるが、それが本気かどうかはわからない。

Clown: I know thou art no
tall fellow of thy hands, and that thou wilt be drunk;
but I’ll swear it, and I would thou wouldst be a tall
fellow of thy hands.
Autolycus: I will prove so, sir, to my power. (5.2.162-66)

道化の曖昧な台詞は、道化自身が実はオートリカスのことをよくわかっていないことを示している。彼が宣誓しようとしているのは、自分たちを出世させてくれたオートリカスに関してなのか、あるいはそれ以外の面も併せ持つオートリカスに関してなのかは定かでない。そしてオートリカスも、なぜ自分がとった行動が他人に幸運をもたらしたのかは明言できない。

同時に、この曖昧性は、劇中のオートリカスに対する観客の受けとめ方に、いくつかの可能性を与えている。上演当時のイングランドにおいて、属性を持たない行商人と常習犯罪人に対する受容は、

その判断根拠となる当時の道徳的規範という観点から捉えれば許容しがたいものであった。しかし『冬物語』においては、オートリカスが無意識に登場人物たちを助ける役割を果たすことで、観客にはその壁を取り払うことが可能となる。オートリカスの思いがけない善行は、彼の受容を可能にする要素として機能するのである。もしオートリカスが完全に心を入れ替え、これまでの生業から足を洗って人生を出直すとしたら、彼がこれまで観客に見せてきた様々な側面のいくつかは失われてしまい、彼の魅力は損なわれる。それは彼がオートリカス以外の人物になってしまうことを意味するからである。すなわち観客受容の在り方として、彼自身が損なわれることなく観客に受け入れられるために、最後の場面における彼の善行は、不自然ではなく最適な演出方法としての効果をもたらすのである。彼が劇中において、他の登場人物たちと同様に幸福な再会の場面に「思いがけず」いられるためには、行商人やごろつき、偽の宮廷人であるだけでなく、彼が「心ならずも」善いことをしたというカタルシスを観客が得られることが重要なのである。

終わりに

オートリカスが今後どのように暮らすのかについて、アーデン版の編者 Pitcher はこの場面に関する注釈で、彼は明らかに再びスリの仕事に精を出すつもりであると述べている。(336n) ケンブリッジ版の編者 Snyder と Curren-Aquino は、彼に改心の余地への期待を残しながらも、過去の上演例を根拠に、本質的には彼の役割が変わりそうにないことを示唆している。(239n)¹⁰ 登場人物たちの台詞からだけでは、オートリカスが改心するのかどうかは読みとれない。これは、羊飼いや道化が今までとは打って変わって明らかに裕福な身分になり、彼らの今後の生活が容易に想像出来るのとは対照的である。そしてオートリカスの今後の生業や改心の有無について、演出家や観客に想像の余地を残すその曖昧さこそ、彼のような人物を劇だけでなく現実の社会においても受容することへの礎となるのである。

観客が求めているのは、オートリカスの積極的な改心ではない。むしろ、彼の位置づけはそのままに、劇を通じて彼のような人物を自分たちの社会に取り込む、そのためのきっかけを、彼の思いがけない善行の中に見出そうとするのである。

註

1. 『冬物語』におけるオートリカスの登場が何を表象するのかについて、Carroll はこれまでに試みられてきた様々な解釈を簡潔に紹介している。(169n)
2. Beier は、17世紀初頭のイングランドにおける行商人の移動形態について、社会的に忌み嫌われ行政当局からは浮浪者と同様の扱いをされていたと述べる一方、時にはオートリカスのように地方で大儲けするような成功例もあったとしている。またその客層は多岐に渡ったと説明している。('Pedlars found markets in all classes and many different locales. Some reported visiting country houses, where they sometimes made large sales.')(89-93)
3. Beier は、中世以降浮浪者が増加し、彼らが様々な地域へ移住するなど、それ以前はなかった新たな社会問題を

- 生じさせたことにより、取り締まりなどの対応策を取ることを行政当局に余儀なくさせたとしてその経過について説明している。(107-70)
4. 引用のテキストは、アーデン版を用いた。日本語訳は、小田島雄志訳（『冬物語』、白水社、1983年）を使用した。
 5. Jütte は、貧困に対する一般的イメージから貧困が生じる原因、彼らの生活実態、犯罪との関わりなどに至るまで、多角的な視点からその現象を捉えている。特に犯罪が起こる仕組みについては8章に詳しい。(143-57)
 6. Kinney, *Rogues, Vagabonds, & Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature*, 85-154.
 7. 'It is impossible to determine how many vagrants made a full-time profession of crime.' (127) Beier は、偽の浮浪者、家族ぐるみの犯罪、別名やあだ名を語る浮浪者など、浮浪と犯罪に依って生業を立てる人々の様々な事例を紹介している。(123-45)
 8. ケンブリッジ版では、それぞれ *First Gentleman, Second Gentleman, Third Gentleman* となっている。オックスフォード版も同様である。
 9. いずれの版も、この場面における舞台情景の演出については注釈があるが、オートリカスの衣装については特に触れていない。(Pitcher, 327n)(Snyder and Curren-Aquino, 231n)
 10. ケンブリッジ版では、1992年の Adrian Noble (RSC) および1994年の Ingmar Bergman による演出例が紹介されている。

参考文献

- Armitage, David, Conal Condren, and Andrew Fitzmaurice, eds. *Shakespeare and Early Modern Political Thought*. Cambridge: CUP, 2009.
- Awdeley, John. *The Fraternity of Vagabonds*. 1561. Arthur F. Kinney, ed. *Rogues, Vagabonds, & Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature*. Amherst: The University of Massachusetts Press, 1990. 85-102.
- Beier, A. L. *Masterless Men: The Vagrancy Problem in England 1560-1640*. London: Methuen & Co. Ltd, 1985.
- Brenner, Reuven, and Gabrielle A. Brenner. *Gambling and Speculation: A Theory, a History, and a Future of Some Human Decisions*. Cambridge: CUP, 1990.
- Carroll, William C. *Fat King, Lean Beggar: Representations of Poverty in the Age of Shakespeare*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1996.
- Chakravorty, Swapan. *Society and Politics in the Plays of Thomas Middleton*. Oxford: Clarendon Press, 1996.
- Chalfant, Fran C. *Ben Jonson's London: A Jacobean Placename Dictionary*. Athens: The University of Georgia Press, 1978.
- Clegg, Cyndia Susan. *Press Censorship in Jacobean England*. Cambridge: CUP, 2001.
- Coast, David. *News and Rumour in Jacobean England: Information, Court Politics and Diplomacy, 1618-25*. Manchester: Manchester University Press, 2014.
- Craig, W. J., ed. *The Complete Works of William Shakespeare*. Oxford: OUP, 1905.

- Gossett, Suzanne. *Thomas Middleton in Context*. Cambridge: CUP, 2011.
- Harman, Thomas. *A Caveat for Common Curstors Vulgarly Called Vagabonds*. 1566. Arthur F. Kinney ed. *Rogues, Vagabonds, & Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature*. Amherst: The University of Massachusetts Press, 1990. 103-54.
- Jackson, Ken. *Separate Theaters: Bethlem ("Bedlam") Hospital and the Shakespearean Stage*. Newark: University of Delaware Press, 2005.
- Jütte, Robert. *Poverty and Deviance in Early Modern Europe*. Cambridge: CUP, 1994.
- Kinney, Arthur F. *Elizabethan and Jacobean England: Sources and Documents of the English Renaissance*. Chichester: Wiley-Blackwell, 2011.
-, ed. *Rogues, Vagabonds, & Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and Early Stuart Rogue Literature*. Amherst: The University of Massachusetts Press, 1990.
- Limon, Jerzy. *Dangerous Matter: English Drama and Politics 1623/24*. Cambridge: CUP, 1986.
- McCullough, Peter E. *Sermons at Court: Politics and Religion in Elizabethan and Jacobean Preaching*. Cambridge: CUP, 1998.
- Newman, Karen. *Cultural Capitals: Early Modern London and Paris*. Princeton: Princeton University Press, 2007.
- Perry, Curtis. *The Making of Jacobean Culture*. Cambridge: CUP, 1997.
- Rickard, Jane. *Writing the Monarch in Jacobean England: Jonson, Donne, Shakespeare and the Works of King James*. Cambridge: CUP, 2015.
- Spevack, Marvin. *The Harvard Concordance to Shakespeare*. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1973.
- Thiselton-Dyer, Thomas Firminger. *Folklore of Shakespeare*. New York: Harper & Brothers, 1884. Rpt. Hanserbooks, n.d.
- Traub, Valerie, ed. *The Oxford Handbook of Shakespeare and Embodiment: Gender, Sexuality, and Race*. Oxford: OUP, 2016.
- シェイクスピア、ウイリアム 『冬物語』 小田島雄志訳 (白水社、1983年)